

『島の眺望』

——補文標識選択と島の制約と受動化

上記(1)–(7)の平叙節の that の省略 (a) と疑問節の whether-if の交替 (b) を一緒にすると、次のようになる。that の省略ができる位置では whether-if の交替もでき、前者ができない位置では後者もできない、という相関性が成り立つ。

- (1) V の補部
 - a. I think {that/ Ø} he's awake.
 - b. I wonder {whether/ if} he's awake.
- (2) A の補部
 - a. I am sure {that/ Ø} he's awake.
 - b. I am not sure {whether/ if} he's awake.
- (3) N の補部
 - a. We must show the proof {that/ *Ø} this is correct.
 - b. We must answer the question {whether/ *if} this is correct.
- (4) P の補部
 - a. They are similar in {that/ *Ø} their fathers are dead.
 - b. Our success depends upon {whether/ *if} it will be fine.
- (5) 主語の位置
 - a. {That/ *Ø} he's awake is certain.
 - b. {Whether/ *If} he's awake is not certain.
- (6) 話題化の位置
 - a. {That/ *Ø} he's awake, I don't know.
 - b. {Whether/ *If} he's awake, I don't know.
- (7) 外置化の位置
 - a. I am sure, because I have been at home, {that/ *Ø} he's awake.
 - b. I am not sure, because I have not been at home, {whether/ *if} he's awake.

つまり、(a) の that 節の省略と (b) の whether-if の交替がきれいな並行関係になっている。省略されている that を Ø-that と呼ぶとすると、平叙節の that と疑問節の whether、平叙節の Ø-that と疑問節の if の分布が、同じ環境においてそれぞれ完全に一致している。

は言えない。

3.3 内的併合と δ 役割

本節以降では、島の環境のより洗練された説明の提案を試みる。単に「移動した構成素は島を成す」とか「島の環境にある構成素からは要素の取出しができない」と留めるのではなく、「なぜ島の環境から要素の取出しが行われず、非文になるのか」と一歩踏み込んだ説明を試みることにする。説明の中心となるのが、Chomsky (2001, 33) が提唱する、移動の結果表層構造における位置から決められる表層意味役割 (surface semantic role) という概念である。

Chomsky (2004; 2008a; to appear) は、併合に外的併合と内的併合の2種類が存在する理由を、1つの要素が、D 構造 (基底構造) の段階で与えられる意味と S 構造 (表層構造) で与えられる意味の2種類の意味を担うという、意味論の二重性 (duality of semantics) に帰している。D 構造の段階で与えられる意味とは、述語との関係で決定される θ 役割 (θ -role) のことを指す。一方、S 構造で与えられる意味とは、表層段階で生じている位置に基づいて決定される作用域や談話上の意味のことを指す。これを Chomsky (2001, 33) は表層意味役割と呼んでいるが、本書では δ 役割と対比しやすいうように、談話 (discourse) の δ のギリシャ文字を取って、 δ 役割 (δ -role) と呼ぶことにしよう。 θ 役割は外的併合された位置で付与され、一方 δ 役割は内的併合された移動先で決定される。1つの要素が基底意味役割 (= θ 役割) と表層意味役割 (= δ 役割) の両方を担っており、それぞれの意味役割の決定に与っているのが外的併合と内的併合である。異なる2種類の意味役割が必要なので、併合に2種類——外的併合と内的併合——が存在するのである。

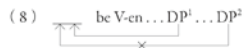
δ 役割には、談話上の役割に当たる、話題 (topic)、焦点 (focus)、提題 (aboutness) や、作用域に関わる質問の Q などが含まれる (より詳しくは、3.8)。これらの δ 役割は、Rizzi の規準的位置が担っている談話的機能と概ね重なり合う。Rizzi は、標準的な生成理論の機能範疇 CP を、発話の力に関わる ForceP、話題の TopP、焦点の FocusP などの機能範疇に分離し、それらの機能範疇の指定部を規準的位置としている。要素が規準的位置へ移動していくということは、その要素が談話上の機能を担うためにそうした位置へ移動して行くと考えられる。したがって、要素の移動は、 δ 役割の決定

5.2.1 最小性原理の例

動詞が複数の補部を伴う場合、受動文の主語となるのは、構造で言えば、直接内項) またはその中の名詞句 DP である。詞の補部として2つの DP、(5)、(6) では1つの DP と1 (7) では2つの PP が現れている。いずれの場合も、移動先から見て、そこに1番近い所にある第1補部の DP、または DP が受動文の主語になっている。

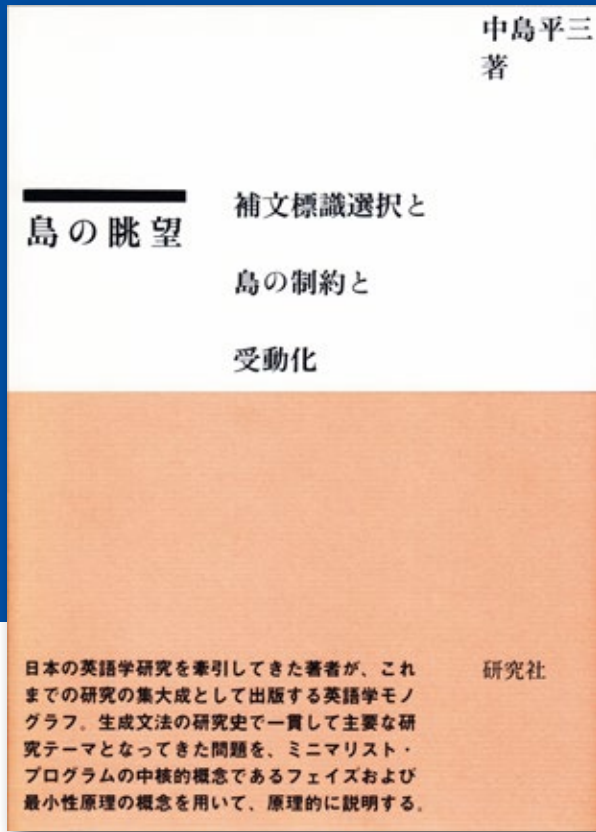
- (4) a. John sent Mary the book. (二重目的語構文)
 - b. Mary was sent _____ the book by John.
 - c. *The book was sent Mary _____ by John.
- (5) a. John loaded the hay onto the truck. (場所句交替)
 - b. The hay was loaded _____ onto the truck by John.
 - c. *The truck was loaded the hay onto _____ by John.
- (6) a. John loaded the truck with the hay. (場所句交替の場所目的語構文)
 - b. The truck was loaded _____ with the hay by John.
 - c. *The hay was loaded the truck with _____ by John.
- (7) a. John talked about the topic to Mary. (2つの PP 構文)
 - b. The topic was talked about _____ to Mary by John.
 - c. *Mary was talked about the topic to _____ by John.

図式化すると、次のように表すことができる。2つの名詞句 (DP¹ と DP²) のうち、移動先の主語位置 (下線部) から見て DP¹ の方が近い位置にある。最小性原理 (3) は、主語位置へ最短距離にある DP¹ が移動することを求める。



『島の眺望』

——補文標識選択と島の制約と受動化



生成文法研究に基づく 英語統語論の最前線!

ジャンル

英語学
言語学

目次より

- はしがき
第1章 補文標識の選択
第2章 補文標識分布のより自然な説明を求めて
第3章 島的環境と δ 役割
第4章 δ 役割とルート変形
第5章 受動化と言語設計の3要因
第6章 まとめと結論
あとがき・参考文献・索引

中島平三 著

A5判 上製 函入り 240頁 定価(本体3,000円+税)

ISBN 978-4-327-40166-5 C3082

刊行年月:2016年2月

読者対象:英語学・言語学の専門家

最初の著作『文(II)』(「現代の英文法シリーズ」第5巻、今井邦彦氏との共著、研究社、1978年)以来、日本の英語学研究を牽引してきた著者が、研究生生活の集大成として出版する英語学モノグラフ。生成文法の研究史で一貫して主要な研究テーマとなってきた補文標識選択、島の制約、ルート変形の適用可能性、受動化などに関わる様々な問題を、ミニマリスト・プログラムの主要概念であるフェイズおよび最小性原理の概念を用いて、原理的に説明する。

<著者紹介>

中島 平三 (なかじま へいぞう) 現在、学習院大学教授。東京都立大学名誉教授。日本英語学会元会長・顧問。著書に『文・II』『英語の移動現象研究』(研究社)、『発見の興奮』『スタンダード英文法』(大修館書店)、『ファンダメンタル英語学』(ひつじ書房)、*Locality and Syntactic Structures* (開拓社)、など。

キリトリ線

島の眺望 ——補文標識選択と島の制約と受動化

定価(本体価格3,000円+税)
ISBN 978-4-327-40166-5 C3082

お名前

備考欄

申込数

書店名(印)

冊

TEL